

獅子も牛も草を食らう

〔聖書〕 イザヤ書 11 章 1～10 節

エッセイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、恐れ敬う霊。彼は主を恐れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするとところによって弁護することはない。弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。

狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては、何もかも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。その日が来れば、エッセイの根は、すべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く。

〔序〕 同盟を結ぶな

今日は久し振りに旧約聖書、しかも旧約聖書最大の預言者イザヤから学びます。イザヤは紀元前 740 年頃から 40 年間から 60 年間にわたりエルサレムを都とする南王国ユダで活躍しました。日本の歴史でいえば、神武天皇が大和で即位したのが紀元前 660 年頃とされていますので、彼は日本の天皇制以前に活躍した人物です。日本最古の歌集「万葉集」には紀元 400 年ごろからの歌が収められています。それよりも 1200 年程昔に、これほど優れた預言文書を遺したのですから、イスラエルの文化水準は、日本をはるかにしのぐものだったことが分ります。

当時の国際情勢は今日の日本を取り巻く国際情勢とよく似ていました。今日のわが国は、アメリカと安保条約を結ぶことで、中国・ロシアという大国との力のバランスをはかっていますが、当時スリア、北王国のエフライム、南王国ユダなどの小国は、北にアッシリア、南にエジプトという大国にはさまれて、国の安全と独立に非常に苦労していました。

スリアとエフライムは三国同盟を結んでアッシリアに対抗しようと、ユダにさそいと圧力をかけてきました。しかしユダはアッシリアと組んで、スリアとエフライムを滅ぼしてもらいます。こうして北王国エフライムは紀元前 721 年に滅びました。しかしユダ王国は後にエジプトと同盟を結んだため、アッシリアに代わったバビロンに攻撃されて紀元前 587 年にエルサレムは陥落し、王以下の主だった人々が 50 年間バビロンの捕囚になります。

このような状況の中でイザヤは終始一貫して「どことも同盟を結ぶな。ただ神にのみより頼め」と叫び続けたのでした。「国内で公平と正義がないがしろにされ、政治が乱れていては、いくら軍事同盟を結んでも、足もとから国が崩壊してしまうではないか。王よ、公平と正義を確立せよ。そうすれば国は固く立つ」というのがイザヤの主張だったのでした。

〔1〕 公平と正義

イザヤの少し前と同時代に北王国で二人の預言者アモスとホセアが活躍しました。アモスは義なる神を、ホセアは愛の神を語りましたが、イザヤはそれを総合する聖なる神を示しました。聖なる神さまは公平と正義で示されるというのが、イザヤの信仰の中心でした。

5章16節をご覧ください。新共同訳では「万軍の主は正義（ミシパト）のゆえに高くされ、聖なる神は恵みの御業（ツェダカ）のゆえにあがめられる」となっていますが、ここは口語訳の方が良いと思います。「万軍の主は公平（ミシュパト）によってあがめられ、聖なる神は正義（ツェダカ）によっておのれを聖なるものとして示される」。聖なる神さまはご自身を公平と正義で示され、また公平と正義であがめられるということが明快にわかるからです。

聖なる神の聖とは「分離する、切り離す」という意味で、他のいかなる被造物とも質を異にし、超越した尊厳をもつお方を表す言葉です。公平と正義が行われない所には、神はおられません。ですからそこには神の恵みはなく、神の裁きをもたらされるのです。イザヤは周りの国々の滅んでいく姿を示しながら、王に貴族に金持ちに、公平（ミシュパト）と正義（ツェダカ）を繰り返し、求めたのでした。

イザヤは北王国イスラエルがアッシリアに滅ぼされる以前から、北王国の住民が経済の繁栄におごり高ぶって、国家滅亡の危機が近づいているのに安閑としている有様を、厳しく警告しました。そして南王国ユダもやがて同じ道をたどると警告し続けたのでした。

5章の預言を見てみましょう。「災いだ、家に家を連れ、畑に畑を加える者は。お前たちは余地を残さぬまでに、この地を独り占めにしている。万軍の主はわたしの耳に言われた。この多くの家、大きな美しい家は、必ず荒れ果てて住む者がなくなる。」（8～9節） 「災いだ、朝早くから濃い酒をあおり、夜更けまで酒に身を焼かれる者は。酒宴には琴と豎琴、太鼓と笛をそろえている。だが、主の働きに目を留めず、御手の業を見ようとしぬ。」（11～12節）

神さまが求めておられるのは公平な裁き（ミシュパト）と恵みをもたらす正義（ツェダカ）なのに、流血と叫喚がかえってくる（7節）。それゆえ、わたしの民はなすすべも知らぬまま捕らわれて行く。貴族らも飢え、群衆は渴きで干上がる（13節）。この預言は、後にバビロンの捕囚となって現実のものとなりますが、当時の人々には聞き入れられませんでした。

[2] エッサイの切り株から

そこでイザヤは「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育つ」（11：1）という預言を語り始めます。エッサイの子ダビデからダビデ王朝は始まりました。その王朝が切り倒されてしまい、根だけになってしまうというのです。ダビデがエルサレムに都を定めた時、神さまは「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。」（サムエル下7：16）と約束なさいました。しかし400年後にダビデ王朝は、自らの不信仰の故に、神の裁きによって切り倒されてしまいます。

では神さまは、約束を反故にされる不真実なお方なのではないでしょうか。イザヤは歴史の先に、主の霊

が豊かに留まる若枝、新しい王が切り倒されたダビデ王朝の根から出現するという新しい約束を聞き取りました。この王は「正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びて」、「目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするとところによって弁護することはなく、弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する」お方です。すなわち公平と正義をもってご自身を現す聖なる神の代理者として、世界を治めるのです。

すると驚くことには、人間社会だけでなく、自然界全体にも共存共栄の平和が広まっていくというのです。9節以下をごらん下さい。「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。」

草を食べているしま馬の群れをチーターが遠くから狙っています。狙いを定めたチーターが猛然と襲いかかります。一斉に逃げ出すしま馬たち。しかし何処までも追いかけられた一頭が、遂に力尽きて食い殺されてしまいます。また、親鳥が大切に育てている可愛い雛鳥を、とんびが突然襲いかかって、さらってしまいます。このようなドキュメンタリーがTVでよく放映されますね。大自然の中の厳しい現実です。

現在の世界では子羊、子山羊、子牛は狼や豹や獅子の餌食として、食い殺されています。動物も魚も鳥も皆、弱肉強食の世界。強いものが弱いものを食べて、生きています。更に人間は、手塩にかけて大事に育てた家畜を食肉として売り渡して収入を得て、自分たちが生活しています。なんとも割り切れない現実です。

でも神さまは初めから世界をそのように創造されたわけではありませんでした。聖書の一番初めに記されている天地創造では、すべて命あるものの食べ物は、青草だったのでした(創世記1:30)。人間が命ある生き物を食べるようになったのは、ノアの洪水以後のことです(創世記9:3)。

しかしイザヤは「わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。」と預言しています。何という嬉しい約束の言葉でしょうか。この言葉どおりに人間の社会ばかりでなく大自然でも、いかなる命も損なわれず、いかなる命も尊ばれる平和が全地を覆って欲しいものです。それは公平と正義をもってご自身を現される神さまを恐れ敬い、公平と正義を確立する王の支配の下に皆が集ってくる時に、実現されていくのです。

[3] すべての民の旗印

イザヤのこの預言から 700 年近く経ち、ダビデ王朝もとっくに滅びてしまったユダの国に、ダビデの子孫のヨセフを父として、ひとりの嬰兒が誕生しました。東の国の占星術の学者たちは、星の異常な輝きから新しい王の誕生を悟り、ユダヤにやって来ました。祭司長・学者たちは旧約聖書の預言を調べて「新しい王が現れるとしたら、ダビデの町ベツレヘムに違いない」と言いました。博士たちはベツレヘムへ行き、新しい王に宝物を捧げて、帰って行きました。しかしヘロデ王や祭司長・学者たちは、拝みに行くどころか、ベツレヘム一帯の二才以下の男の子を皆殺しにしました。馬小屋で誕生した嬰兒はエジプトに逃れて助かりました。

こうして「エッサイの切り株から芽生える若枝の出現」という700年前のイザヤの預言が、イエス・キリストの誕生というかたちで実現し、神さまの新しい救いの御業・新約聖書の新しい歴史が始まりました。そこで私たちは、馬小屋から十字架・復活にいたるイエス・キリストのご生涯に、主の霊に満たされて、公平と正義をもって恵みの支配を進める全く新しい王・救い主の支配を見るという、神さまの新しい歴史に向き合うことになったのです。

イエス・キリストは十字架につけられながら、自分を十字架につけた人たちや、野次馬となっ
てはやし立てる人たちの赦しを神さまに祈り求めました。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何を
しているのか知らないのです」。また自分の横に磔にされている犯罪者が憐れみを求めると「あ
なたは今日わたしと一緒に樂園にいる」とおっしゃいました。

すべての人の罪を我が身に引き受けてその裁きを受け、自分の命と引き換えに神の赦しを求めて
息を引き取られたイエス・キリスト——ここに聖なる神の公平と正義があらわされ、聖なる神が
このような公平と正義をもってご自身を示されたのでした。これこそ全く新しい神の恵みの支配で
す。

イザヤは「その日がくればエッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求
めて集う」と、この平和の王の預言をしめくくりました。旗印とは皆が集ってくる目印として立て
られる旗のことです。イエス・キリストの旗印・十字架がすべての民を神の民とする旗印として立
てられたのです。

そこで、福音を世界に広める立役者になった使徒パウロは、イザヤのこの預言をローマ帝国の都
に暮らす人々への手紙の中で、次のように言い直して書き送りました。「イザヤはこう言っていま
す。エッサイの根から芽が現れ、異邦人を治めるために立ち上がる。異邦人は彼に望みをかける」
(ローマ15：12)。旧約聖書の世界ではユダヤ人だけが神の民でした。ところがエッサイの
根から現れた新しい王の下では、差別・除外されていた異邦人もすべて集められ、文字通り世界中
のすべての人々が喜びと平和で満たされ、希望で満ち溢れるようになると言ったのでした。

[結] 日々、十字架を背負って

「美しい国日本」という言葉で船出した安倍内閣の下でも、政治も一般社会も汚れて醜い出来事
が次々と湧き上がってきています。世界各地で毎日爆弾テロが大勢の命を殺害しています。「主は
これに公平を望まれたのに、見よ流血、正義を望まれたのに、見よ叫び」(口語訳5：7)とイザ
ヤが叫んだ預言が、今も聞こえてきます。イザヤの時代から2700年、私たち人間は何を学び、
何を改善して来たのでしょうか。

神さまのを恐れ敬う霊に満たされ、弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平
に弁護する公平と正義をもつ王の支配を、今こそ真剣に求めなければなりません。人間の社会ばかり
でなく大自然でも、いかなる命も損なわれず、いかなる命も尊ばれる平和が全地を覆う世界を、
真剣に求めなければなりません。

神さまはキリストの十字架によって公平と正義を現し、新しい恵みの支配を進めておられるという福音を、私たちは今こそしっかり信じて、自分たちの日常生活を通して証して参りましょう。弱い者・貧しい者・低い者が尊ばれる世界、獅子と牛が共に青草を食らう平和を、決して諦めずに希望し、実現していくために、励んで参りましょう。

主イエス・キリストの声が響いてきます。「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(ルカ9：23)。私たちの責任は重大です。

完